
BLEACH The blade of soul

ichieva

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLEACH The blade of soul

【Zコード】

Z23870

【作者名】

ichieva

【あらすじ】

藍染との死闘に終止符を打つた一護。その代償は誰よりも彼の側に在り続けた相棒の消失だつた。「ありがとう。斬月」しかし彼等は不幸にも選ばれてしまつた。『英靈』という名のソイツの暇潰しの玩具に。「よお、英雄

Bleach × ネギま × リリカルなのは Strikers のクロス s s ! その他にもハガレンと Fate の設定をごちゃ混ぜにした設定を使つていたりしますのでご注意を。正直自分でも挫折 失踪感がハンパないですがどうか生暖かい目で見守つてくださると嬉し

い
で
す。

01・Goodbye Purification World 1(前書き)

この作品は「ようす小ネタ掲示板」に投稿していた「BLEACH The Black Moon Rising」を所々修正したもので、前作から見てくださっていた方はお久しぶりです。それでは拙作ではあります、「BLEACH The blood off soul」をお楽しみください

魂を蝕むこの亀裂は世界きみと僕との別れ道に似て

されど、鎖の端を握るこの手に楔は突き立てられたまま

戦友きみに送る筈だったサヨナラに別れを告げ

僕は、新しい空へ落ちていく

BLEACH The blade of soul
o o d b y e P u r i f i c a t i o n W o r l d 0 1 : G

前。 硬い薔を開くと同時、毒の瘴気と害悪を撒き散らしたのが約一ヶ月
やがて禍々しい大輪を咲かす悪が芽吹いたのは百余年前。

永い

永い戦いが終焉へと近づいている。

己が欲望を満たさんと多くの魂魄と平和を搔き乱し狂わせた巨悪、
藍染惣右介。

自身と浦原喜助が創造した一つの崩玉を融合させた真なる崩玉を用
い、超常の異形と化したその姿。

神を超えた天を統べる、筈だつた。

地を這う者と天を翔る者。乖離し、永劫交わることの無い天地その
もの。

死神とも虚とも次元を異にする存在への昇華。

確かに頂に君臨した、筈だつた。

ならばと六枚羽の超越者は自問する。

ならば、^{わたし}天を見下ろすこの存在は何だ
^{じげん}？

「馬鹿な！――！ そんな筈があるか！――！ 人間如きがこの私を
超えるなど、そんなことが」

「

激昂し、否定する。

信じ難く、耐え難い現実は考え難いほどの奇跡によつて形成されていた。

片や資質が有り、一世紀以上を研磨に費やし野望の極致に至つた者。

片や資質が有つたとは言え、一年にも満たぬ短期間での叩き上げ。

積み重ねた経験の差は歴然。されどそれをいとも容易く突き崩す、圧倒的な天賦の才。

まだ、欠片ほどの靈圧も感じない。

二次元の存在が三次元に干渉出来ぬよう、理解不能のその力は彼我の領域の差を証明していた。

憤怒。恐怖。そして未知から来る恐怖が藍染の裡に渦巻く。

だが、そんな感情に黒崎一護はどこまでも無関心で無感動だった。

全身を覆う漆黒。溢れ出た靈圧が一護の周囲を黒く踊る。

振り下ろすは刃。

断ち切るは悪。

成すのは終焉。

「

?無月?

」

重く、重く、重く。

光すら貪る超重力の如く、深く。

穢れた純白は気高き漆黒に圧し潰された。

地鳴りに似た破壊音の残響に空気が震えている。

空中に浮かぶ一謹。足下に広がる緑の無い大地に刻まれたのは巨大な、巨大過ぎる斬撃の痕跡。

怪物が残した爪痕の様に太く、冥界に繋がる黄泉路の様に深く昏い。

そんな傷跡が地平の果てまで続いている。

ただ一撃のもとに生まれた断崖の両端に横たわる二つの肉塊は物言

わざ、完全に生の気配が失われていた。

一護は見下りしていた視線を上げ前を見据える。

胸の高さ、手が届く位置に浮かぶその物体の名は『崩玉』。常にこの騒乱の中心に在り、藍染惣右介という一人の男を魅了した超常物質。

ビキィツ

その悪の芽吹きの元凶とも言える物が、

ザア

罅割れ、細かい粒子となつて風化していく。

風に乗つて空氣中に溶けていく崩玉に伴い、地に転がる藍染惣右介だつた二つの塊も輪郭が崩れ、世界から忘れ去られるように消えていく。

やがて全てが大気に還元され、この戦いの本当の終焉を迎えた。

唯一この場に生存して立つ勝者、黒崎一護。

彼は勝利の歓喜に打ち震えることはせず、かと言つて戦争の終わりに安堵の溜息を吐くこともせず、自分が傷つけた大地を見下ろして

いた。

墓穴にしてはデカすぎるし変なカタチだ、とその瞳に寂しさを滲ませながら。

墓穴。そう、墓穴だ。

この墓に名を刻む者は一人いる。

一人は藍染惣右介。

もう一人は

バキンつ

硬質な物体が碎ける音がした。

右手の柄も鍔も無い黒刀が粉々になり、次いで胴から眼の下まで覆っていた黒い帯布がバラバラと崩れ、髪も元の色と長さになり疎解時の姿へと戻った。

そしてまたバキンつと破碎音が響き、今度は始解状態へと。

一護は瞬歩で断崖の淵に降り立ち、背後の墓所へ振り返る。

そして二度目の破碎音が聴こえ、

「…懐かしいな」

それは原初の力。

この世界へと踏み込んだ当初の幼き愛刀の姿。

未だ名も知らずにいた頃の巨大な日本刀がその手にあった。

恐らく、次が最後になるだらつ。残された時間は短い。

言つべき言葉はそれこそ曰ほどで、だが全てを消化するには時間が足りなさ過ぎる。

故に、

ただ簡潔に、

この一言に万感を籠め、

告げる。

「ありがとう。斬月」

スル、と、その手から零れ、深い闇の底に落ちていく斬月。

刃の光はやがて奈落の深淵に消え、

パキイ

ン

そんな音と共に淡く、儂く、散つていって…

何処か遠くで、重い扉が開く音がした。

お前等は運命を追いかけているわけでも

運命に追いかけられているわけでもない

ちっぽけな獣共に紅い鎖が絡まる様は

陳腐な作りの操り人形に似て

BLEACH The blade of soul
Goodbye Purification World 02:G

2

扉だ。

気がついたらその扉の前に突っ立っていた。

周囲に広がる空間は全てが白で、何の起伏も無いまつ平らで真っ白な世界にそれは浮かんでいた。

高さ5mはあるつ重厚な石造りの両扉。表面には根や枝が複雑な伸

び方をしている大樹が彫られていて所々に外国のものらしき文字も刻まれている。

それはいつか見た？地獄の門？の禍々しさとは正反対の神秘的な雰囲気を放っていた。

その扉を前に死神姿で佇む一護は、見上げながら呆然と呟く。

「なんだよ、コレ…」

そして、立ち竦むその背に、

「よお、英雄」

無遠慮に、親しげに、声が掛けられる。

「ツーーーー！」

咄嗟に振り返った其処にソイツは居た。

真っ白な世界に君臨するソイツは透明な人型。

男なのか女なのか。

生者なのか死者なのか。

人間なのか人外なのか。

平面なのか立体なのか

正体不明のその存在は、

「…………… オイ」

うつ伏せに寝そべってジャ
プを読んでいた。

「ちょっと待てなにやつてんだテーマは。つーか誰だ」「

「見てわかんねえか？」
読みたいのか？」
ジャ
普 読んでるんだよ。なんだ、お前も

「そーじゃねえ。登場していきなり空気ブチ壊しやがつて。だいたいそこは読むならガ ガンだらが」

「話を聞きやがれ」――――――――――――――――――――

怒声を上げ、一護は跳んだ。

父親直伝のドロツプキックだった。

「あー、ゴホン。よお英雄」

「今更取り繕つてどうすんだよ」

一護の魂の咆哮から5分後。二人はドッカリとその場に腰を下ろし、胡坐を搔いて対面していた。

目の前の人型はあれだけ突きまわされたにも拘らず苦痛を少しも態度に出すことなく平然としている。そもそも何が何だか良く分らない存在なので、痛覚というものが無いのかもしれないが。

もうどうでもいいか、と一護は溜息を吐き、最優先で訊きだすべき事を尋ねる。

「で、教えるよ。お前はいつたい誰でここは何処でなんで俺がここに居るのか」

「いいぜ、教えてやるよ」

そつ言つて人型は朗々と言葉を紡ぎだす。

「まず最初に、この空間とオレという存在は本来は同じなんだよ」

「？」

「」の領域を目指した者が最終的に辿り着くのが此処であつて、ソイツが求めた答えがオレそのものである」

「…………お、おう。なるほど」

明らかに理解できていない顔の一護。

それに構わず人型は話を続ける。

「オレであり此処を指し示す言葉は無数に在る。
根源。アカシックレコード。真理。神。世界。宇宙。全。個。無限。
有限。そして……」

ピタリと言葉を止め、人型はスウッと一護を指差した。

「オレはお前だ。黒崎一護」

厳かに、まるで言葉そのものに途轍もない圧力が有るかのように重々しく、そう告げた。

敵意でなく殺意でもなく悪意でもない。絶対的支配者が放てる威圧感。

真正面からそのプレッシャーを叩きつけられた一護は若干狼狽えつつ、

「ど、どういう意味だよ……それになんて俺の名前……」

「言つただろ。オレは神であり世界、全であり個だつてな。お前といつ一人がオレを構成する莫大な要素の一でありオレはお前達

から構成されているのさ。

それにオレは万物万象を創造した原初の親だぞ。自分のガキの名前
くらべ知つてるのは当たり前だと思わねえか、ん？」

「…………

返答は沈黙。

眼前の怪しき抜群のアンノウンの話の内容は「I am God . Under stand?」という俄かに信じ難いもので、アンビリバボーな奇跡体験と受けとればいいのか中二病の痛い妄想話と受けとればいいのか、一護は判断に迷っていた。

そもそもこれが現実でなく自分の夢だという可能性もあるのだ。それなら何でもありかと一護は一応田の前の存在を神様（仮）と認識することにした。

「話を続けるぜ。飽きずについてこよ」

「あー、おつ」

既にだいぶ投げ遣りな返事を返す一護。

「次にお前が此処に居る理由を話そつ。
簡単に言つと、お前は世界…つまりはオレに選ばれたのさ」

人型は親指で自身を指差し、じつ続けた。

「『英靈』の資格を持つ者として」

「？」

新出した聞き覚えの無い単語に一護は首を傾げた。

「なんだよそのエイ……エイなんとかってのは?」

「『英靈』つてのは戦死者の魂に対する敬称、または優れた魂という意味を持つ単語だ。コレくらいのことなら普通の辞書にも載ってるぜ。自称国語が得意な高校生クンよお」

ワザと挑発するよつた言い方に額に青筋が数本浮かんだがそう易々とキレるほどじゃないと怒りを抑えた。

「ヒヒヒッ、オレは別にまた取つ組み合いになつても良かつたんだけどな。まあ今は話を進めるか。
さて。さつき言ったのが人間達が定めた英靈の一般的な意味だが、本当の英靈の意味とは少し違つてくる

「なんだ? 他にもなんかあるのかよ」

「ああ。英靈とは過去未来現在の全時系列に存在した英雄達の靈のことを指す」

「英雄つて……昔話とか伝説とかにでてくる奴らのことか?」

「そつ、実在したか否かを問わずに神話や伝説や歴史において偉大な功績を残し、死後も人々の間でその武勇伝が語られ信仰の対象となつた英雄達! ソイツ等の靈格はやがて精靈、神靈、聖靈へと昇華され世界の理の外側に存在する『英靈の座』と呼ばれる領域へ押し上げられ、靈長最強の魂へとその存在を変貌させる。

有名どころは星座にもなったヘラクレス。イギリスの大英雄アーサー王。東方遠征で知られたアレクサンドロス大王とかな」

明かされる世界の真実の一端。

魂を司る死神にすらも知られなかつた過去の偉人達の魂の行方。

それを聽かされた一護は、

「へー、スゲエな」

と、呑気なリアクションを返した。

「……いやちょっとタイム。

お前さあ、人が結構重要なこと喋つたんだからもうとにかく…大仰に驚くとかしろよ」

「うるせーな。これでも十分驚いてるんだぜ。

アレだ、内容が壮大すぎでうまく頭にはいつてきてねーんだよ」

「まあオレの神サマ宣言にもたいしたリアクションしてなかつたようだから仕方ないといえば仕方ないな…」

期待していた反応が返つてこなかつたのがそんなに残念だったのか、がっくりと肩を落とす人型。

そんなの知るか、とばかりに一護は続きを促した。

「で、その英靈が俺にナンの関係があんだけ?」

「だから言つただろ。お前には英靈の資格が有る」

人型はやつ言つとおもむろに両腕を広げ、

「アカソン新たなる英靈、黒崎一護。世界はお前を歓迎するぜ」

祝福する間に、狂喜するやつと、嘲笑つやつと、宣告した。

お前はもつ神の奴隸だ、と。

「……ハアっ！？ ちよ、まつ、おーー、なにふざけたこと言つて
んだよーー！」

一護は思わず立ち上がり、声を荒げた。

先ほど田の前の存在が説明した英靈とは、後世に語り継がれるほど
の偉業を成した英雄が死後に至る位階のことだ。

自身はそんな大それた事は行つておらず、死神といつ高位の魂魄の
存在だが未だしっかりと生存している。

そんな旨を半ば怒声に近い声音で叫び終えると、

「別に死ぬ必要なんざねーんだよ

根底を覆すような言葉を吐き棄てた。

「なん……だと……」

「やつは説明しなかったが、別に死後でなくとも英靈になれる方

法はあるんだぜ？ かなり特殊だが実例もある

そして人型は語り出す。

とある王だった少女の、後悔と最後は幸福に満ちた魂の軌跡を。

全ては愛すべき國の為に。

性別を偽つてまで王の座に着き、輝かしい霸道を歩んだ一人の少女騎士。

それでも結局は國を守ることは出来ず、後悔の末導き出した答えに縋つた。

死の間際、世界との契約により生きたままあらゆる時間軸に呼び出され、とある小さな戦争に参加し新たな答えを得た少女の肖像。

「つてなわけでソイツは自分が居た時代に戻り、安らかに永眠しました」と。

今この話に出てきた奴は英靈になるに相応しい功績を残してきた。故に死んでなくともオレとの契約も可能だつたんだよ。

お前だつてそうなんだぜ。藍染惣右介という悪を倒し10万の命を救つた英雄サンよお

「…………ッ！ けど、俺がいつも前とその契約をしたんだよ！」

俺は神頼みなんざした覚えねーぞー！」

「そう！ それがお前とアルトリア・ペンドラゴンの決定的な違いだ！！」

勢い良く立ち上がった人型は詠つようになに次の言葉を紡ぐ。

「お前からの契約の申し込みをオレが受諾するんじゃなく、オレが勝手にお前との間に契約を結んだのさー。」

「なつ……」

一瞬、その意味が呑み込めず一護の動きが凍る。

人型はその表情がなによりの愉悦だと謂わんばかりの笑みを浮かべ、ズイッと顔を一護に近づけ、

ゆつくりと、一字一字を明確に口ずさむ。

「こ れ か ら よ ろ し く た の し ま せ て く
れ よ ?

エ イ ユ ウ ビ の 「

ゴオン、と。

背後の扉が開き、無数の黒い腕が一護の全身を絡め取った。

「な、なんだこれ！？」

「今からお前を別世界に送る」

混乱した一護に極めて冷静で抑揚の無い声が掛けられる。

「やつちの世界でお前がどう立ち回るのか、ここから高見の見物をさせてもいいが。

まつ、消える筈だった相棒を蘇らせてやつたんだ。この世の原則は等価交換。料金としちゃ丁度良いだろう?」

「トツメ！」

黒い腕は徐々に扉の中に一護を引きずり込んでいき、

「あばよ黒崎一護。精々行く先々で翻弄されて、精々オレを楽しま
せろ

百年分満足させてくれば元の世界に返してやらなくもないぞ?」

やがて一護は奥の間に完全に溶けて、

ギィィイ

バタン

扉は完全にその口を閉ざしてしまった。

「やれやれ、行つたか。

最近禁忌を犯す馬鹿がいないもんで退屈していたところだつたんだ
が、タイミングよく面白い奴を見つけられた」

広大な空間に独り声が漏れる。

「ヒヒヒッ、しかし驚いたぜ。現代で英靈の資格を持つ奴が未だ居
たとはなあ。それも『守護者』でなく正規の。あのガキは間違いな
く後の戸隠界の伝説になるだろ?」

そう言いその場に座り込んだ人型は胸の前へ透明なボールを持ち上
げるよにして両手を上げた。

すると、その掌から二つの光球が生まれた。

一つは水浅葱に、もう一つは碧色の光を放っている。

「物語をより刺激的にするためのスペースも必要か。まずは負け犬ならぬ負け豹。おつきは空っぽ蝙蝠。あとは」

唐突に黙り込む人型。そして数秒が経過してからひとつ変化が訪れる。

掌の上に新たな光球が生み出され、その色を眺めた途端人型は薄く笑つた。

「なんならコイツとぶつけてみるのも面白そうだ。なあ、『正義の味方』?」

その光球はどこかくすんだ、しかし力強い紅色の光を放っていた。

アーチャーさんは出てきません。
なんとなーく書いてみただけです

03 : Accelerate Fate (前書き)

もう、馬鹿か自分は……
半年以上放置するとか……

二コ動の幻想入り動画だつたらつゝ主失踪タグが張られてもおかしくない……

今話は×とある魔術&ネギまで。禁書の方はアニメ、コミックス派の人はネタバレ注意。

待ってくれていた読者の皆様。どうぞ、拙作ですがお召し上がりください。

追加 : blog推奨、miwaの「chanlog」

03 : Accelerate Fate

l
e
r
a
t
e

F
a
t
e

b
l
a
d
e

s
o
u
l

0
3
:
A
c
c
e

それは異様な光景だつた。

極寒の積雪の大地。陽がまだ上っている頃なら地平の果てまで一面純白の世界を臨めただろう。

だが今、世界は暗い。

太陽は見当たらず夜空の星々が僅かに光を放つてゐる。
本来ならこのロシアの地では日輪が輝くべき時刻なのに。
それこそが第一の異常。

第一の異常は雲の向こうに浮かぶ十字の大地。
半径40?。右側だけがアンバランスに突出した世界各地の十字教
由来の物品を強制集結させて組み上げられた異形の要塞。
未だに上昇、膨張を続ける空中神殿『ベツレヘムの星』。

そして最後の異常は天空を舞う一つの影。

一つは青白く、神々しい巨大な翼を持つた異形のもの。

100mを越すものから数十?程度のものまである無数の氷翼。刃
の様に鋭く、宝石の様に美しいソレが生むのは天災の如き暴力の嵐。
神話をなぞらえるように無慈悲に、凄絶にその力を揮つてゐる。

もう一つは黒く、一振りの刀を持った人間のもの。

たなびく黒衣。鎖が巻きついた右腕と一体化した黒刀。何者にも染まらない美しき漆黒を纏うに相応しい強い眼。その瞳が語るのは勝利の意志。屈せず、折れず、ただ真っ直ぐに眼前の敵を見据えている。

二つの影 黒崎一護と大天使ガブリエルは高度数千m上空で真正面から激突した。

「ゴツッッ！――――！」

世界が揺れた。

遙か離れた戦場から大地へと衝撃が降り注ぐ。

剣と翼が斬り結ぶたびに、

死神と天使が交錯するたびに、

靈圧テレズマと天使の力が闘^争い合つたびに、世界は悲鳴を上げた。

一瞬という言葉すら気が遠くなる刹那に展開される剣戟。
左右からの胴薙ぎ、前後からの刺突、交差させた袈裟切り。
長大な翼を巧みに操り苛烈な攻撃を仕掛ける天使。
それを一護は剣で防ぎ、いなし、躲し、そして、

「！？」

素手で掴み、引き寄せ、斬る。

ドッ！

「Aren't...」

水の天使の口であろう箇所から人間には理解不能な言語がこぼれる。傷をつけられたことに対する憤怒か。もしくは自身に匹敵する人間の存在への驚嘆か、困惑か。

マネキンのようなその身体の女性的な胸部。そこに深く刻まれた袈裟の傷痕を大天使は愕然と見下ろしていた。

「どうした、何かおかしい事でもあつたかよ？」

掛けられた声にガブリエルは頭を上げ、その視線を絡め取られた。主の使いの大天使を、神話にて次元違ひの力を振るつた後方を司る大天使を、まるで臆することなく見据える黒崎一護の眼に。

左手に掴んだ氷翼を手放し、一護はこう続けた。

「そんなに認められねえか、天使より強い人間がいることが

「……hazard」

両翼がより鋭利さを増し鎌のように標的を挟み込もうとする。胴を断たれる直前に一護は上に逃れ、そのまま更に数千mを瞬く間に駆け上った。

『ベツレヘムの星』すら遙か足下に、天上の月により近く。一瞬遅れガブリエルは後を追おつとするが、その必要は既に消えていた。

その一瞬で、敵は再び数千mを移動していたのだから。

天鎖斬月の刀身から濃密な月牙を溢れさせ。

黒い流星となり、一護は落ちた。

ドンッッッ！――――――！

一際強力な衝撃波と爆音が空間を搔き乱す。

その発生点で大天使ガブリエルはこの戦闘で初めて全力の防御に廻

つていた。

莫大な天使の力を注ぎ込んだ両翼を頭上で交差させ、直下落下の黒刃を受け止める。

ギギギギギギギギギギギッ！－！－！

暗い空へ撒き散らされる靈圧と天使の力。次元を超えた力と力の激突に空間が軋む。

数秒間、今までの神速戦闘と比べたら気が遠くなるような膠着状態が経過しても拮抗は続いていた。

どちらも退かないまつたくの互角。この状況が崩れるのは一護が力尽きた時か、ガブリエルが限界を迎えた時か。

ビキイ

此処で、変化の兆しが現れる。

斬月と接触した箇所から翼に走った鱗。小さな鱗裂は徐々に広がり、侵蝕し、青白い身体は僅かずつ高度を下げ始めた。

大天使の力は未だ衰えていないのに、何故。

「うおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

咆哮が上がる。

黒崎一護。死神代行。英靈にされた者。

単純明快なことに彼の力の底はまだこんなモノではなかつたということ。

二つの影が一瞬の交差を経て急速に離れ、そして…

大天使の左腕と左翼が宙を舞つた。

片端となつた天使の500m真下の一護の横を削がれたパートが落下していく。
くるくると、一直線に。

「ヒカル」

殺意が爆発した。

神より賜わりし体躯を翻し、遙か下方の敵を忌々しげに見据え、残された鱗だらけの右翼を振るい、一護もソレに応え頭上の空を斬る。どちらのリーチでもこの距離では相手に届くべくも無い。が、両者の中間で不可視の何かがぶつかり合い、炸裂。

光速と比喩すべきスイングスピードにより生じた破壊的空気圧同士の衝突。そして爆風。

滅茶苦茶に荒れ狂い凶器と化した風を切り裂いて進むのは黒い斬撃、月牙天衝。

空を昇つていく、文字通り天を衝く一撃。

足下から上昇してくる月牙に対しガブリエルは回避行動を取ろうとし、

ポン、と。

誰かの手がその無防備な背に置かれ、

「月牙天衝」

天地に刃向く双刃がその身体を圧し潰した。

その風速はまさに天災の領域。
月牙と月牙が生んだ破壊の余波はまるで巨大台風レベルの猛威だつ
た。

砕け散つた斬撃の黒い靈圧まじりの風が一護の全身を強く打ち付け、その独特な死霸装をバタバタとはためかせている。

視線は前方、この風の発生点に固定されている。

そして漸く大気の氾濫が沈静した頃、

「 b k n a s n n k t g a 」

「……タフだな、まだ動けるのかよ」

満身創痍のその姿を視認した。

胸部から下は消え去り残つた右腕と右翼も半ばまで崩れ、左頭部も吹き飛んでいる。

先の一撃　　正確には一撃　　でケリがつかなかつたのは奇跡と言つても良い僥倖であった。

が、その起ころべくして起ころつた奇跡に意味を見出すことが出来るのだろうか。

天使の力による血テレスマ修復すら行えず、端から徐々に空中分解していく身体。

もうあと一度振るえば折れるであろう傷だらけの右翼。

今や神話の見る影もなく疲弊しきつた大天使。

もはや勝敗は決したのは誰の目にも明らか。ここからの逆転劇などという都合の良い未来を幻視する者などこの場に居ない。

そつ

ガブリエル自身ですら今の状態では黒崎一護の排除は不可能と判断

を下したのだ。

ならば引っ張つてくれればいい。力を。

眼前の敵の排斥に天使の力テレスマが足りぬと言うなら、補充すればいい。

『神の力』大天使ガブリエル。

その身が向るは『青』『後方』そして『水』。

ドッ、と一護達の遙か足下で重い音が響いた時、既に大地の色彩は地平線まで一変し剥き出しの土と緑が顔を覗かせていた。

世界を白に染め上げていた見渡す限りの積雪は一瞬でそのまま莫大な水量へ変換され、一瞬でガブリエルへと吸収されたのだ。

地平の向こう側でも恐ろしい速度で雪が融解、吸収され、このまま

いくとゴーラシア大陸どころか地球全土の水分を併呑しきるだろ？

そして上空にも変化は顕れていた。

発光する夜空。貪り得た力は肉体復元を後回しにして天体操作へと注ぎ込まれる。

宇宙に点在する無数の星々が天使の命に従い規則的に配置を変える。天に描かれる円図形。次元違いのパワーを孕む、超大な魔方陣。再現されるのはかつてソドムを滅ぼしたと伝えられる断罪の矢。

キュイイイイイイイイイイイイイイ

まだ、完成ではない。

都一つ壊滅させた無数の弾丸が集束し、結合し、練り上げられていく。

地球の地表半分を火の海にする浄化の光たちが一つの球へと形を成していく。

イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

肌を震わせる高音を発しながら渦巻く光。

人間一人を跡形もなく消すには釣りが多過ぎる圧倒的脅威。

「…………」

だが、ソレを目にしても一護は動じなかつた。

それは諦観でも強大過ぎる力に感覚が麻痺したわけでもない。

彼は自身に向けられたその力の程が理解できた。

理解できるならば、止められぬ道理など……無い。

鋒を突き出し、左手は右腕に。

長い橙色の髪の間から、覚悟が灯つた双眸が覗く

「俺はこの後、当麻の処アイツに行かなきゃなりねえんだ。だからもつ、終わりにしようぜ。この戦いは……」

力の奔流が進る。

天に上る青き光。噴出す漆黒。

渴巻き、絡まり、融けていく靈圧。

黒崎一護という存在を更なる高次へと導く禁忌にして奥義。

ただ一人の男だけが知るその領域の名は……

『最後の月牙天衝』

「俺が勝つ」

君臨するは純粹な黒を纏う者。

「魂魄を司り、神を冠するに相応しき者。

今の彼は死神であり斬魄刀であり、黒崎一護であり天鎖斬月でもある。

その身は刃。その役は剣。

ならば刻まれた銘の通りに

天を、鎖す。

無月

接触する円と線。

全てが緩慢になった時の中、光球と斬撃が鳴き合い…

音は消え、風は死に、世界は黑白に別たれて…

一護の耳朶にアノ『扉』が開く音が響いた。

横倒しの摩天楼の空が酷く歪んでいた。

足下のビル壁も、右手のコンクリートの大地も左手の大空も。世界の全てがグチャグチャに入り乱れたその光景に嘔吐感を覚えるのも無理はない。

まともな平衡感覚を保てず、たまらず地面と呼べぬ地面に腰が落ちた。

眩暈と頭痛に襲われながら一護はウンザリとした溜息をつき、

「気分が優れないようだな、一護

「ああ。やっぱ慣れねーよ、コロ」

背後からの声に振り返らず応答した。

今更姿を確認するまでも無い。その声の主は黒崎一護と共に幾度も

死線を駆け抜けってきた唯一無二の相棒なのだから。

黒尽くめの偉丈夫……斬月は一護の隣に立ち、語りかける。

「今回の『反動』は長いだらつ。20日間、と言つといふか。『無月』まで使つたのだから無理からぬ事ではあるが……」

反動。

黒崎一護が英靈へと召し上げられ、一体どれ程の時が経過したのだろうか。

5年、10年、いやそれ以上。とにかく長い月日が流れていった。その時間の中で発覚した英靈となつた恩恵の一つに『最後の月牙天衝』の反動の軽減がある。

いや、軽減というには多少語弊がある。

正確には肩代わり。

斬月の消失。つまりは死神の力の消失。

その強大な力の代償としての消失。さらにはその消失の代償として一護が背負つたものは、地獄だった。

裂ける肉。折れる骨。血管を突き破る血の激流と暴れ狂う心臓。激痛に叫ぶたび筋肉が千切れ、血を吐くたびに内臓が飛び出る。

だが、死ねない。

壊れた端から順に超速再生し、また破壊。

再生、破壊、再生、破壊、再生、破壊、再生、破壊、再生、破壊、再生、破壊……

延々と繰り返されるそのサイクルは、まさに等活地獄。

獄卒に身体を碎かれ、風が吹くたびに生き返りまた碎かれる。彼の
八大地獄が一。

瞬時の発動だとしても最低5日間。力を使えば使うほど、地獄は長
引く。

現実世界では凄惨たる光景が展開されているだろう。この時の一護
は死神でなければ英靈でもなく、ただの脆弱な人間に成り下がる。
肉体の影響で精神世界もこの有様というわけである。

「……ああ、わかつてゐる」

一度や二度ではないのだろう。この終わりの見えぬ旅路が始まつて
から禁断の領域に足を踏み入れたのは、
だが此処に居る限り現実の苦痛は届かない。地獄を体験することは
無い。

ならば、この痛みは？　彼の心を貪る、この痛みは…

「外がもう、俺の知つてゐる世界じゃないってことも、わかつてゐる」

『真理』との邂逅から彼はただひたすら数多の世界を巡らされてき
た。

短くて一週間。長くて数年。各世界の滞在時間はバラバラであれど、
その全てが不本意な決別でしかなかつた。

身体の奥底からアノ『扉』が開く音がして、気付けば世界は様変わりしている。

仲間が出来た。

護りたいモノがあった。

だが、そんな意志を易々と踏み砕いていく絶望^{てき}がいた。

抗えたことは一度としてなく、

別れを告げることも許されなかつた。

強くあるひつとして折られ、立ち上がってもまた折られ。

いつたい何度、涙を枯らしだらう。

いつたい何度、彼の精神世界は海に没したことだらう。

「だから心配しないでくれ。もう、慣れた」

「一護……」

「それにして

立ち上がり、一護は己の刀に背を向ける。

斬月は向けられたその後姿が酷く脆く、小さく、寂しい背に見えた。

だが同時に、一護の両足は震えることなくしっかりと、大地を踏みしめている。

「アイツが言ってたんだ。？俺もこれから頑張っていくから？って

とある世界の、とある小さな戦争で出合った、とある磨

耗した『正義の味方』を田指していた男の話。

『剣士』の役として呼ばれたその戦争の終幕に、彼の『刀兵』は屈託の無い笑顔を浮かべてそう言った。

黒崎一護以上に救いが無い運命を歩みながら、再び尊い理想を進むことを誓つたのだ。

「アイツだつて足搔いてる。なら、俺だけが立ち止まるわけにはいかねえんだ」

振り返つた一護は寂寥を瞳に滲ませながら、それでも真っ直ぐ斬月の眼を見た。

「……そうだな

恐らくあの戦争に参加していなければ彼の心は運命の前に屈していたかもしれない。

あの戦争の後も一護がここまで倒れず進めたのは、偏に『あの男』の影響なのだ。

何時しかその存在は斬月に次ぐ一護の心の支柱となつていた。

斬月は嘆いていた。

自身のせいだ一護が悠久の時を歩まなければならなくなつた事に。自身が負う筈だった力の代償を一護に背負わせている事に。自身では到底一護の心が折れぬよう彼を支えることが出来なかつた事に。

斬月は感謝していた。

傍に居すとも、自身の主君を支えてくれた『ヒヤシロウ』という存在に。

「そろそろ向こうで目え覚めそうだな」

混沌が渦巻いていた世界が少しずつ形を取り戻した。

一護を中心にそれは加速度的に球状に広がり、在るべき場所にあるべき色が納まり、やがて完全なる姿を王の前に曝け出す。

天地が90度傾いた、ビルの群れが建ち並ぶ世界。

天を仰げば蒼穹。その青は今は若干厚い雲が所々邪魔しているが、すぐに吹っ飛ばしてやると一護は意気込んだ。

そして、運命に組み込まれたことを意味する『歯車』。

精神世界の大地や天を問わずアチコチに点在する巨大で無骨な無数の歯車が重々しい音を発して廻っている。

「行くのか？」

「ああ、今度はどんなとこか確認していく」

「… そうか」

「じゃあなオッサン。また来るぜ」

短く挨拶を済ませ、一護は世界から姿を消した。

そして一人、この世界に残つた斬月は、

「…運命よ。何時になつたらお前は一護をこの呪縛から解くつもりだ」

天に向かつて右手を伸ばし、その先に嘲笑を浮かべる『真理』を幻視し、憎憎しげに目を細める。

アア、力が欲しい。

お前を縛る鎖を碎く、力が欲しい。

それが手に入らないのなら、祈るまで。

あの白い世界に君臨する非道な神以外の何かに。

お前を苦しみから解き放つてくれる軌跡の存在に。

「が……ッ……！」

身を裂く感覚と共に目覚めたのは少し硬いベッドの上。

あまり清潔とは思えない薄暗い部屋の壁際にぽつんと置かれた寝具。

「おや、お早う。田が覚めたか」

そう頭上から声を掛けってきたのは、薄汚れた白衣を身に纏う一人の翁。

全身包帯まみれな一護が横たわるベッドの脇に立つ、70~80代くらいの立派な口髭を蓄えた男。

「あん、たはッ……？」

「レヴィイヌ・ファウスト。じゃない医師であり魔法使いじゃ。あの

子が血相変えてお主を引き摺ってきた時は驚いたが……気分はビリ
じゃ？」

「あの、子……？」

「つむ。ほれ、挨拶なさい」

ファウストの背後に隠れていた小さな影があずあずと前に出てくる。

その影は白磁の肌、黄金と見紛う長いプラチナブロンド、人形のように美しく精緻な造りの顔、フリルをふんだんにあしらったこの部屋に似つかわしくないクリーム色のドレス。

お姫様。まさにその言葉が相応しい、美しい少女だった。

「あ、あのっ。私はエヴァンジエリン・アタナシア・キティ・マクダウェル、です……」

たどたどしい口調で一生懸命に自己紹介をしたその少女は、

「わっ、私と友達になつてくらひやいーー！」

言葉を噛みながら、右手を突き出してきた。

03 : Accelerate Fate (後書き)

えー、どうも。『無沙汰です。

前回より半年間も放置しておいてスミマセン。

リアルが結構忙しかったことはそうなんですが、それでもコレはあとでいいことですが大学一発合格しました。

推薦なのに面接は無く、ただ小論文を書いただけなのですが。

学力試験だったら絶対通らなかつたと断言できる。

で、いまは富崎のほうに引っ越し平凡なキャンパスライフを送っています。

今回前半はとある魔術の禁書目録とクロスさせましたが、一護、強化し過ぎかな？

ガブリエルの天体操作はともかく、接近戦では互角に戦えるんじゃないかなーと原作を読んで思い、こんな具合になりました。

あと作中で出てきた『力が理解できるのだから止められない道理はない』という理論。

アレなんか、bleachの原作で出てきた『正解が正解で止められないわけがない』と同じくらいのトンでも理論でしたね。

あと一護の精神世界描写なんですが、Fateのアーチャーと同じように歯車を追加してみました。

でもあの歯車は正規の英靈と守護者では有無の違いが在るのでしょうか？ イスカンダルの固有結界の描写には歯車の存在は無かつたですけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2387o/>

BLEACH The blade of soul

2011年5月7日15時30分発行